
今夜、旗を掲げよう

海夢 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今夜、旗を掲げよう

【Nコード】

N2669K

【作者名】

海夢 翔

【あらすじ】

「いいか！世界を救うのはギルドでも王国軍でもない！！俺たちだ！

俺たち七人が・・・この世界を守るんだ！」

9歳の頃の俺が言い放った言葉が現実に！？

マイペースな主人公が世界のために立ち上がる。

魔法有り、剣技有りのファンタジー！！

*いくつか修正し直してます。

作者の文才はしょぼいので至らない点が多いと思いますが、長い目で見てくださったらありがたいです。

プロローグ（前書き）

初めて書く小説となります。

下手すぎる作品ですが、どうか温かい目で見てください。

プログラーグ

「いいか！世界を救うのはギルドでも王国軍でもない！！俺たちだ！俺たち七人が……この世界を守るんだ！」

「……い……きなさい。起きろつて、言つてんでしょうが
あああああああああ！……！！……！！……！！……！！」

部屋の中に鳴り響く声で一人の少年が目を覚ます。眠い目を擦りながら弱々しい声で言葉にしていく。

「『葵』・・・頼むからもう少し静かに頼む。」「あんたがなかなか起きないからでしょ！！いいから早く起きろ。隊長が呼んでる。」
「ええ、またかよ。あの隊長ことあるごとに俺をこき使いやがつて。」

「遅刻ばかりするのが悪いのよ！ま、私もあの隊長はあんまり好きじゃないけどさ。な〜んか裏がある気がするのよね・・・って寝るな！！早く行け！！」「うわっ、け、蹴るな！わかつたから」

葵と呼ばれる少女に急かされながら少年は身仕度をする。

「今さらあのときの夢か……でも、なんで……」

十年も前に自分で言っていた言葉なのだ。あの言葉の半分は実現さ

れた…いや重要だったことは実現できなかった。
というのも、世界を救ったのがあんなセリフを言った俺達ではなく、後に帝国軍と名乗りだす集団だったということだ。帝国軍はこの世界が壊滅する直前で天上人と呼ばれる種族の者達から世界を救ったいわば英雄軍団ってやつだ。「まあ、あのときは9歳のガキだったからな」

始めから世界を救うなんてことは無理だった。それでも当時の夢人達七人は本気で世界を救おうとしていた。世界を救うために特訓して、武器を作り、秘密基地も作った。第三者から見ればそれは子供がただ遊んでいるようにしか見えない光景。本気だったのはたった七人。自分たちが攻撃を仕掛けようと準備を終えたとき帝国軍が戦争を終わらした。圧倒的な力で。世界を救おうとしていたそのときの七人はみな、違ったことを考えていた。当時リーダーだった夢人がその小さい集団を解散させた。反対する者もいたが気にしていなかった。また別の目標が出来たのだ。

そして十年の月日が流れ、滝沢夢人は帝国軍に入団した。

「それにしてもホントになんていまさら、あの夢が？まさか入団二ヶ月で軍抜けて、新しい軍作れっていう神様からのお告げか？」

なんてな。そんな軍作るほどの財力も名声もない。
そして、なにより「面倒なのはごめんだ」

プロローグ（後書き）

感想等がもしあれば、よろしく願います。

第一話 討伐任務〜受諾編〜（前書き）

なんか前の話プロローグって感じじゃないような・・・

この小説の作者は基本、細かいことは気にしません。進んでいくうちに矛盾が出てきたりしたらすみません。

出来る限り気をつけますが。

この世界の設定はそのうち書く・・・と思います。
とりあえずファンタジーです。

第一話 討伐任務／受諾編／

昔の出来事を思い出しながら歩いていた夢人は、十分ほどで帝国軍支部の一つに到着した。

帝国軍トウォーター支部。この支部は簡単な任務を受け新人育成に力を入れている支部。夢人のように入団したばかりの兵たちが大半だ。トウォーター支部は自然豊かな場所に建てられ稽古しやすくなっている。

門を抜けたが、そこから部隊長室に行くのがいつも面倒だ。指紋チェックや暗証番号などの厳重なセキュリティチェックが待っているのだ。

「まったく、たかが部隊長に会うのに神経使いすぎだったの。」

ようやくチェックが終わり、部隊長室の部屋の前に立つ。身なりを整え深呼吸しドアをノックする。「第十四番隊二等兵、『滝沢夢人』入ります！」

できるだけ、丁寧に見えるように入室をするが、

「今朝も訓練をさぼったようだな。罰としておまえには無償で一つ仕事をしてもらう」どうやら丁寧にしてみたのも無駄に終わったようだ。とりあえず無視するわけにもいかないので、「わかりました。」と言っておく。

「ふんっ、これが任務の内容だ。期限は明後日まで。同行者はなし

でおまえの単独任務として行ってもらおう」

内容は最近、村に出没するモンスターの討伐だった。しかしこれは・
・とても普通の二等兵が一人でこなせる任務ではない。しかし反論しても無駄だとわかっていたので、適当な挨拶だけしてその部屋を出た。

部屋からは、別の兵士と部隊長とが、「あの任務を一人では……あいつも終わりですね。死人がでてよいのですか？」「何を言う？罰なのだから当たり前だ！それにあの任務はもともと存在すらない。俺が今作ったものだ。つまりあいつが死んでもバレなければ俺の責任にはならん。」

通常、帝国軍が受諾している任務と言うものは任務管理会と呼ばれる組織が各地域にそれぞれある部隊に直接、申請をしているもの。部隊長が任務作成をすることは禁止されているのだ。

「ようやくこの部隊から厄介払いができるという訳ですか……」

「その通りだ！」

といって笑う声が聞こえた。

多少の不快感を覚えながらも任務の準備を始める。今回は間違いなく不正な任務だとわかっていている夢人だが上の奴らに報告しても上手くはぐらかされるのは明白。無駄なことはしない主義なのだ。それに命令違反は謹慎。運が悪ければ減俸になってしまう。それだけは避けたいのだ。

「でも確かにこのままじゃ死ぬな。……バレなきゃいけるか？」

相手も嘘の任務をつきつけてきたのだ。こちらも嘘をついても問題ない。そう考え俺は葵に連絡を繋げた。

「もしもし？天川ですが？」「夢人だけど、頼みがあるんだ。」

そういつて任務内容と今回つけられた条件について話した。

「そんなの死ねって言われてるようなものじゃない！あの隊長やっぱり気に入らないわ！！いいわよ。私が同行してあげる。後で、レキにも声かけとくから！一時間後に街の広場に集合ね。」

「悪いな。いや、ありがとうだな。」

「べ、別にいいわよ。そんなことより遅刻したら許さないからね！」

電話を終えて広場に向かうと細い体で150cmくらいしかなさそうな身長の上着のショートカットの美少女がいた。

「早いな、レキ。」

「ゆ、ゆゆゆ、夢人さんこそ早い……です……」

レキはいつも話し方が堅い。なんでだ？

俺は疑問をそのまま口にしてみた。

「別に呼びすてでいいぞ。敬語もしなくていいし。ってかなんでそんなに緊張してんだ？もう十年以上の付き合いだろ？」

「そ、それは……その、えと」

「いや、無理にしなくてもいいけど。それより今日はありがとな。」

と言って頭をなでてやった。レキの髪は綺麗な緑色の髪でいつもサラサラだ。

顔が真っ赤なレキをなでていると今度は蒼い髪の少女が顔を真っ赤

にしなから近づいてきた。

「あんたは、任務の前になくしてるのかな？」鬼の形相で現れたのは葵だった。美少女なのは間違いないが時々、恐い。葵が水の弾丸を作り出していたので、慌てて言い訳をしたが話しは聞いてくれないようだ。笑いながら弾丸を放とうとする直前で俺は葵を止めようと体を抑えつけた。

「あ、あんた何抱きついて…こんな人通りの多いところで……その…もつとロマンチックな場所が…」

葵が何か言っているような気がしたがよく聞こえなかった。空気が抜けたように大人しくなっていく葵を見て安堵した…が、後ろから僅かな殺気を感じ振り返った。視線の先には刀を研いでいるレキがいた…レキは笑顔で「どうかしましたか？夢人さん。」と研いだ刀を近くの木で試し斬りしながら答えた。

こうして前途多難な任務が幕を開けるのだった。

「任務内容、カネシンの村近辺に出没するモンスター『サイクロプス』の討伐」

「サイクロプスはやつかいよね。あの隊長よく一人に対してこんな任務出せたわよね」

カネシンの村までの道中、葵は怒っていた。

「サボり魔がいらなかったんだろ？仕方ねーよ」

「それにしてもやりすぎよ！私たちがいなかったらあんた間違いく死んでるわよ？」

「ああ、ありがとな。おかげで生きて帰れそうだよ」

「別に・・・いいわよ！」

「レキもありがとな！」

「い、いえ、お誘いいただきありがとうございます。」

遊びに誘われたかのように微笑まれても困るのだが…

和やかな雰囲気ですぐに到着した俺達は村人に話を聞こうとしたのだが、村には人の気配がなかった。

「も、もしかしてみなさんサイクロプスに…」

「いや魔物が現れたから全員でまとまって生活してんだろ。集会所へ行ってみよう」

顔に似合わず、残酷な想像をしているレキを適当に引っ張って集会所に向かう。

予想通り、集会所には村人が全員集まっていた。しかし…

「もう我慢できない！これ以上、村のみんなが減っていくのを見てられるか！！王国軍も帝国軍も動こうとしない。ギルドの連中は頼りにならない。俺達が何とかするしかないんだ！」

そうだ！そうだ！と若い男たちが後に続き、農具をもって殺気だっていた。

「よしなさい。すでにギルドの人間が何人も帰ってきていない。この村を離れるほか、道はない。」

殺気だっている男たちをなだめるように村長らしき人が前に出た。

「それでも、やらなきゃならねえ。この村を捨ててどこにいけるんだよ！帝国軍は助けにもこないんだ。新しい土地を用意してくれるはずもないだろ！」

『帝国軍が悪者だ』的な雰囲気になり、今にも戦闘しにいこうとしている。あんまり良くないタイミングで来ちゃったなあと考え、少し様子を見ようと言おうと後ろを見たが、葵の姿はなかった。

「待ちなさい！私たちが助けてあげるわ！！」

どうやら葵は飛び出していったようだ。もう少し空気を読んでほしいものだが「あいつらしいな」とため息交じりにつぶやき、俺もレキをつれて前に出た。

「帝国軍の滝沢という者だ。遅くなつて悪かったな…少し話を聞かせてもらえるか？」

俺達の登場で村人達は落ち着いてくれたらしい。葵の行動が吉とでたのだ。

葵はこちらに勝ち誇った顔を向けてくるが無視することにしよう。調子に乗らすとろくな事にならないし。

「被害状況と今回出沒したサイクロプスについて聞かせてもらえるか？」

「はい。被害者のほとんどが女子供です。サイクロプスは身長およそ3メートルほどです。すみません、このくらいしか情報はわかっていません。」

予想以上に情報が少ないな。仕方ないが…

任務に与えられた時間も少ないから情報集めもしてもらえない。

「行く・・・か」

「そうね、はやく行きましょ」

手っ取り早く自分で行くのが一番早そうだ。葵も賛成してるし。

「レキも行けるか？」

「まかせてください！」

といってガッツポーズをする姿は・・・うん、かわいい。

「よし！討伐任務を始めるか。」

「変態・・・」

俺の気持ちをテレパシーかなんかで察知した葵はこちらを睨んでいるようだ。

深く反応すると水の弾丸が飛んでくる恐れがあったので葵を放置し、レキをつれて村の近辺の搜索に向かった。

第一話 討伐任務〜受諾編〜（後書き）

キャラがうまく書けていないのは、僕の完全な力不足です。
これから頑張りますので見守ってってください。

感想等があればよろしくお願いします。

第二話 討伐任務〜秘密作戦編〜（前書き）

今回で戦闘に突入する予定だったのですが、作戦を考えている途中で話が完全に脱線してしまいました。
とりあえず見てください！

第二話 討伐任務／秘密作戦編／

「これは、迷ったら死ねるな・・・」

村から出た夢人たちはさっそくサイクロプスの搜索を開始した。

村の近辺、つまりサイクロプスがよく出没するのは村の東側らしい。東側の森は食材となるものが豊富にあるのだが、サイクロプスが現れてからはなかなか入れなくなったのだ。

「この森を闇雲に搜すつもり？半端ない広さよ」「いや、普通に搜しても時間がかかるのは間違いないよ。だ・か・ら、葵さん？」

「な、なによ？」

「今回のこの任務、『釣り』で行こうと思う」

ふふんと笑う夢人に対し、葵とレキは目を丸くしてこちらを見ている。

硬直がとけて先に口を開いたのはレキだった。

「あの、釣りってなんですか？」「へっ？」

「す、す、すみません！今までの任務でもやったことがなかったの
で・・・」

釣りといえば今回のように村人が襲われたり、誘拐事件で相手のアジトを見つけたりするのに使われる言わばおとり作戦。俺達のような下っ端なら一度は経験してる作戦だ。知らないなどは以ての外。葵もそのことに驚いているようだ。

「レキ、ほんとに知らないのか？」

「はい・・・すみません」

研修でも習うはずだが・・・？

まあレキはちょっと天然だしな、と夢人は1人軽く頷きながら納得していた。

隣では釣りについて葵がレキに教えている。

「それで私にさせるつもり？」

「あの〜」

「このメンバーじゃ適任だと思うけど？」

「あの〜」

レキが小声で何か言ってるが大方、私がやります、とでも言つつもりなのだろう。だから気づかないフリをする。葵も反応しないところを見ると、レキにはさせれないと考えているのだろう。レキは実力はあるが時々・・・いや結構な頻度でドジな面がある。おとり役なんてとてもさせられない。夢人の考えは完全にまとまっていたのだ。

「仕方ないわね。私がするしかないかあ」

「夢人さんがする訳にはいかないのですか？」

葵の承諾の声のすぐ後に不吉な言葉が聞こえた気がした。ここは冷静にかつ慎重にうまく事を運ばないともものすごく嫌な予感がある。すでに夢人からは冷ややかな汗が流れている。

「レキ・・・サイクロプスは女の子を特に狙うそうだ。いくら葵が女の子らしくないからって俺がすると出てくるかどうかわからないぞ。」

慎重に話を流そうと考えていたがちよっと本音が出てしまった。：

地雷かもしれない。

「誰が女の子らしくないですって!!」

地雷を踏んだようだ。口は災いの元とは本当らしい。

葵が魔法ぶつ放し、直撃を受けている途中、次のレキの発言が葵の手を止めた。

そして同時に俺の顔を青くする発言となった。

「女装すればいいじゃないですか!」

なんてうれしそうな顔で発言するのだろうか・・・
まずい、葵がわるい顔をしている。これは・・・

「そうね。ちょうど今の魔法で服がボロボロになっちゃたから、一度村に戻って服を借りましょう!女物の」

「おiiiiiiii!!葵は本当の事言われたからってこんな作戦に乗るんじゃ!ぐはあ!魔法はもう止めてー!!」

「やっぱりボロボロの服じゃ戦いづらいですよ!!服を借りましょう!女物の」

「レキiiiiiiii!!頼む。キャラ変わってきてるから!ホント元に戻ってくれええええええ!!!!」

意気揚々と腕を引っ張って二人の美少女と哀れな少年は通ってきた道を引き返していった。

村に戻った夢人達は村人達に心配された。いや正確には心配されたのは夢人一人だけだが・・・

葵の魔法によって傷だらけだったからだ。

その葵とレキは村にいた女性達と話をしていた。

話が終わったと思ったら村の女性達は夢人の方を哀れむような目で見ていた。そのうちの一人と俺は目が合うと女性は微笑んだ。

夢人は別に読唇術が得意という訳ではないが、その女性が「大丈夫：まかせて」と言ってるような気がしたらしい。

「ネコミミなんかどうですか？」

「いいわね！でも、メイド服は譲れないわ！！」読唇術なしでも聞き取れた声は少年の不幸を加速させていった。

しかし、夢人はそれほど焦ってはいなかった。理由は、今現在この村は魔物に襲われて大変な時。そんなときにネコミミやらメイド服なんかがあるはずないだろ・・・という確信があったからだ。だから焦らない。マイペースがモットーだから。

しかしこの考えは後々、盛大に後悔することとなる。

「それでは、これより第一回、夢人女装大作戦を開始します!!!」

わあわあと騒がしい村の女性陣＋葵とレキのテンションはフルモードだ。ちなみに男性陣は俺に対して両手を合わせて拝んでいる。本当に今この村でサイクロプスによる被害があるのだろうか…と疑ってしまうほどの盛り上がりだ（女性のみ）。でもまあ、このことでこの村が少しでも活気を取り戻してくれるならいいか…と納得していた。というかそういうことにしておかないと自分が立ち直れない。一つ目の服装からそんな考えに達していた。

「一つ目の衣装を発表します！一つ目はカネシンが誇る三姉妹、フアッションセンス抜群のラグノリア三姉妹考案の服装です!!!」

簡易型カーテンが開き、生まれて初めての女装が披露された。

頭には大きなピンクのリボン。さらにフリフリなピンクのスカートなど。ピンク一色でかためられた服装。少年からは、魂が抜けていた。いやいやほんとに抜けてないけど・・・でも、そのくらいシヨックだ。

完全に意気消沈してしまった夢人を無視して次の人が考案した服装に着替えさせられた。

ちなみに着替えさせているのは、夢人からの最後の抵抗で女連中を拒否。

村の小さな子たちが手伝ってくれていた。

「おにいちゃん、頑張つてね」

そんな子供たちの励ましのおかげで意識を少し取り戻した夢人は、次の衣装を確認して驚愕した。

「さあ、次の服装は私。葵が考案しました！！それでは、はりきってどうぞ！」

どこにはりきる要素があるのかを教えてほしかった。

葵の考えた服装はメイド服そのものだった。なんで緊急事態なのにメイド服があるんだろうか、この村は・・・

「ただのメイド服じゃないわ！ポイントはこの肩見せのファッションよ！！こののために私がさつきじききに改造したんだから。」

「どのときだよ！今は！そんなもの作る暇があるなら討伐準備しろよ！」とつつこんでやりたがったが夢人にはすでにそんな体力は残っていないかった。

なぜならこのタイミングで葵の考案した服装が来たということとは次は・・・別人のようにテンションが上がってしまっているレキだ。そのことを考えると最後につっこむ力を残しておくべきなのだ。恐らく一番手強いのが・・・来る！！

「最後はレキの考案。これだけは子供たちに見せずにレキが自ら着せるそうよ！」

「！？待て、聞いてないぞ！」「10分で済みますから少し眠ってくださいね。『エア・スリープ』」

「おまえ、まほう・・・」

次に夢人が起きたときレキ以外の葵を含む村人達が謝っていた。
服装は男物に戻っており、おとり作戦は葵がすることになったそう
だ。

眠っていた間のことを夢人が葵に聞いてみるとただ「ごめんね」と
言われるだけだった。

最後のファッションショーを見ていた全員が忘れることを決意して
いるようだ。

・・・ただ一人を除いて・・・

第二話 討伐任務〈秘密作戦編〉（後書き）

後半の話について・・・後悔はしてません。

結局、何がしたかったのかはわかりませんがね。

しかもいまだに世界観については謎だらけですね。

とりあえず、討伐任務が終わるまでは確実に謎のままです。

おもしろくないと思いますが今後とも読んでやってください！お願いします。

感想等がございましたらよろしく願いします。

第三話 討伐任務〜波乱の幕開け〜 (前書き)

戦闘書くの難しいよ・・・なんでみなさんあんなにうまく・・・
ま、今回ほとんど戦闘シーンないんですけどね！

第三話 討伐任務〜波乱の幕開け〜

少し暗くなってきたことで森は気味悪さを増していた。

おとり役になった葵の姿は目立つように赤い長衣を身にまとい、俺達が葵の姿を見失わないようにしていた。

俺とレキは、おとり作戦がばれないように二手に分かれ、葵とはある程度の距離をあけていつでもサイクロプスとの戦闘が開始できるように準備をしていた。

俺は剣に手を置き作戦の開始を待っていた。

今回俺達が立てた作戦は葵がおとりとなり相手の気を引いてるうちに、レキが魔法で攻撃。その後すかさず俺が剣で攻撃するという手筈になっている。

ここからではレキの様子が見れないが、魔法の準備も出来ているだろう。後は待つだけ・・・

そのとき葵の近くにあった木々が揺れ、その奥から青白い体が見えてきた。間違いなくサイクロプスだ。

葵は油断させるためにサイクロプスを出るだけ引きつけていた。十分にひきつけ、葵に当てずに魔法を撃つには絶好のポイントとなっていたのだがレキの魔法はなかなか発動されなかった。

「レキのやつ何してんだ・・・まずいこのままじゃ・・・仕方ねえな！」

俺は作戦が失敗したと判断し葵に指示を出す。

「作戦失敗だ！このまま向かえうっぞ！！」

葵は長衣をサイクロプスめがけて投げ魔法を放つ。

俺もそのまま突撃し、剣撃を加える。

サイクロプスは完全にひるみ隙がうまれている。一応、葵の長衣のおかげで奇襲自体は成功していた。

「レキは何してんだ？」

「わからない。ここからじゃ見えないわ」

メンバーの一人が行方不明。このまま戦っても勝算は低い。
やはりここは・・・

「一度、逃げてレキを捜すぞ！」

「そうね。まったく、あの子は・・・」

レキは戦闘となると主に支援型の魔道士なのだ。

怪我をしてすぐに回復にまわれる仲間がいない戦闘というのはかなりきつくなってくる。

葵も支援型の魔法は使えるが、俺1人でサイクロプスを相手にするのは、まず不可能。

やはり、万が一の事態を考えるとレキなしでの戦闘はやめた方がいいだろう。

葵がもう一度水の弾丸を今度は押し込むように放ちサイクロプスを吹き飛ばした。

「今のはほとんど威力がない敵を吹き飛ばすだけの魔法だから早く引き上げるわよ！」

葵に言われた通り俺はすぐに戦線を離脱しレキの搜索を始めた。

「それにしてもレキは作戦無視してどこに行つたのよ！作戦中に迷子だなんて・・・どれだけドジなのよ！」

「まあまあ、この森暗くて先がよく見えないから仕方ねえよ。」

「ずいぶんレキの肩を持つわね。あ、あんたもしかしてレキのことが・・・その・・・」

「何の話だよ！とにかくはぐれちまったことをどうこう言つても何にもならねえ。早く捜し出そうぜ！」

「はあゝ。そうね、はやく・・・捜しましょ・・・鈍感・・・」

なんだか疲れたかのようにそして呆れられたかのように葵が呟いていた。

「待つて！静かに・・・」

俺と葵は草むらに隠れた。すぐ近くをさっきのサイクロプスがうつついていたからだ。

「葵の魔法で時間を稼いでけっこう距離をおいたはずなのにもうこんな近くに来てやがったのかよ」

「もう一回やっとく？」

「いや、何度も同じ手が通用するとも限らない。とりあえずこのままやり過ごすぞ。」

小声で話し見つからないようにできるだけ体を小さくして奴がいなくなるのを待つ。

しかし奴はありえない事をした。

「さっきのやつ、どこに？早くしないとあの方に・・・」

「！？あのサイクロプス人語を！」

通常サイクロプスたちは人語を話さない。

しかしあのサイクロプスは今間違はなくしゃべった。

サイクロプスが人語を話す。

考えられる理由は何者かによって改造された・・・ってことくらいだ。

「これは、何かいろいろ面倒なもんが絡んでそうだな・・・葵？」

「あいつは、まさか！」

「おい！どうした！！葵！」

その瞬間、葵は急に立ち上がりサイクロプスめがけて魔法を放った。

「おまえ！おまえはクロード家のおおおお！！！」

「落ち着け葵！」

俺の制止を振り切り葵はサイクロプスめがけて魔法放ち続けた。

葵が息を切らしながら魔法を止めると煙の中からは無傷の青白い体が現れた。

「そうか、その魔力の波長・・・『あの方』が言っていたのはおまえか。」

「黙れ！あいつは私が必ず・・・ころ・・・」

魔力が尽きた葵は意識を失い倒れた。

「その女は生かして連れて行く必要があるんだ。お前はどけ。」

「悪いな！なんでこいつがこんなに取り乱したかは知らねえが、渡す訳にはいかねえなあ」

「そうか。それじゃ死んでも文句は言うなよ。俺はその辺のサイク

ロプスの比じゃないぞ」

「だからどうした!」

リーチが違う相手に真正面からの特攻は無謀と考え、フェイントをかけ後ろに回りこみ一撃で決める・・・はずだった。後ろに回りこんだ後、奴の姿が消えたのだ。

「なっ!ど、どこに?」

「ここだよ。小僧」

上にいた。空を飛んでいる!?

通常、サイクロプスには翼はない。

ならあいつは希少種? いやサイクロプスに希少種は存在するが翼はない。

「言っただろう。俺はその辺のサイクロプスの比じゃないと。」

そういつてそいつは俺にむかって持っていたこん棒で殴りかかってきた。

俺はガードも間に合わず頭に強い衝撃を受けた。

「おしまいだな」

「ふざ、けるな・・・俺はまだ、負けて・・・」

「ならば」

膝をついていた俺を蹴飛ばしこん棒で俺を殴り続けた。そしてサイクロプスが俺の持っていた剣を手に取り、その剣で俺にとどめをさそうとした。

「最期はせめて自分の剣で死ぬがいい」

「まだ・・・だ。」

体に力が入らない。

すでに立ち上がることもすらできない。

「ここまで・・・なのか」

目を開けているのも辛くなってきた俺だったが最後に幻のような光景を見た。

その光景は優しくて今までの生涯の中で一番綺麗な光景。

光が見えた。魔法の光だ。

サイクロプスの手にあった剣が弾かれいく。

ぎりぎりですべての意識が落ちる直前、俺は月明かりに照らされたレキの姿を見た。

第三話 討伐任務〜波乱の幕開け〜（後書き）

うーん、主人公弱い・・・

ちなみに主人公も一応、魔法使えますよ？ ただの予定ですけど・・・

・
まあ、まだ詳しくは書きませんが。

それにしてもちよつと展開速すぎですかね〜
自分でもわかりませんがw

感想等がございましたらよろしく願いします。

第四話 討伐任務／レキの幻影／（前書き）

いつもより、1000文字くらい多いです。
あんま増えてないですね。

第四話 討伐任務／レキの幻影

冷静に魔法を放ちサイクロプスの攻撃を阻止したレキだったが、倒れている夢人と葵を見て表情が怒りに変わっていった。

レキは手に持っていた首を地面に投げた。

サイクロプスは少し驚いたが、やがて確信したかのようなだった。

「やはりな。この三人の中で最もやっかいな人間はおまえだと最初に見たときからわかっていたよ。」

まさか、こっちのサイクロプスがやられるなんてね。」

レキは悔しそうに口を開いた。

「迂闊でした。まさか、討伐対象が二体いたなんて・・・」

「そこで転がっている二人は途中で俺達に一回ずつ会っていないがらまったく気づかずに戦闘していたがな。おまえ達は何か作戦を立てて討伐しようとしていたが完全に情報不足。それで任務だと・・・笑わせるな。だが俺の奇襲を受け作戦に参加できなかったとはいえ、俺が見失っているうちに一匹狩るとは・・・だがここまでだ」

「長い話ですね。いいから黙ってください。今、殺してあげますから。」

「なめない方がいいぜ。おれは普通じゃない。」

「口を開くな」

その瞬間レキは風の刃を作りだしサイクロプス目掛けて放った。力

マイタチのようなものだ。

レキの魔法は空気をつかさどるもの。

「あながどこにいてもかわすことはできませんよ！」

「かわす必要はないさ」

サイクロプスはカマイタチが自分に迫る前に空気を・・・殴った。
そしてカマイタチは消えてなくなった。

「！？なんで！」

「自分で作り出した魔法なんだ。原理くらいわかっているだろう。
カマイタチってのはたしか空気中に物質が全く存在しない空間。つまり真空の部分ができてそれに触れることで初めてカマイタチって
いう代物になるもんだろ？異物を入れたとたんそれは消える。当たり前
のことだ。」

サイクロプスは夢人と戦っていたときに見せていた早さを超えるスピードで飛び上がり、レキを蹴り上げた。

宙に舞っているレキ目掛けてこん棒で殴りつけた。

殴られたレキは声も上げずに地面にたたきつけられる。

頭からは血が流れ、左腕もうまく動いていなかった。地面にたたきつけられたときに折れてしまったのだ。

誰が見ても満身創痍。相手は無傷。闘いを続けて勝つのはまず不可能。

しかし・・・

レキは夜空を見上げ月を見た。

そして・・・不敵に笑みを見せた。

「まだ、残ってるみたい。」

レキは短剣を抜きサイクロプスに向かっていった。

「自分の十八番を破られ、やけになったか！やはりおまえもただの人間だったようだなあ！！」

サイクロプスはこん棒を構え、向かってきたレキに止めの一撃を加えた・・・はずだった。

サイクロプスの正面目掛けて突っ込んで来ていたレキの姿が消えていく。

「あなたの敗因を教えてあげる。」

「くっ！どこだ！！」

レキの姿が大量に発生した。

「敗因その一。今日は満月だね。この光・・・ホントにキレイだ。」

「何の話を・・・」

「分からないのかな？」

サイクロプスの周りからはカマイタチが放たれていた。

「これは効かないと言っただろう。」

「そうだね。でもこれならどうかな？」

「ぐわあああああああああああああああ！？」

サイクロプスがカマイタチを消そうとしたがカマイタチは消えることなくサイクロプスの堅い皮膚に傷をつけた。

「はああ。何をしゃがった？」

「ふふふ。じゃあ敗因その二。あなたは私に奇襲したときに仕留められなかった。だから今こうして苦戦してしまってる。」

「苦戦だと！？俺を誰だと思ってる！！」

「知りませんよ。今から死ぬ奴のことなんて」

感情のない声で言ったレキが、顔を上げ決意した。

「あなたの最大の敗因を教えてあげます・・・あなたは私の・・・私の仲間を傷つけた！！」

「くそ、なんなんだ？こいつが使ってる魔法は！」

「最期だから教えてあげますよ。『蜃気楼』ってご存知ですか？」

「蜃気楼だと？俺が『幻影魔法』の一種にかかっているのか！？」

レキの姿が動きだし、サイクロプスを囲む。

「短剣ごときで俺を刺せると思うなよ！サイクロプスの体にはまったく効かんわ！例えおまえがいくら幻影で姿を隠そうが俺は殺せない」

「ご忠告ありがとうございますね でも・・・刺さりますよ？」

大量のレキがサイクロプスの体を刺すモーションに入る。

「そういえば・・・もう一匹のサイクロプスの首・・・あれはカマイタチの傷じゃなかった!」

そして見た。レキの持っている短剣に纏われている風を。サイクロプスは心臓を刺されその場に崩れ落ちた。

「この魔法は・・・幻影じゃないですよ。・・・少し魔力を使いましたね。」

ため息をつき、レキもその場に倒れた。

「・・・キ。レキ!大丈夫か?」

目が覚めると目の前に夢人がいた。レキは顔を真っ赤にして飛び上がった。

「・・・ゆ、夢人さん!ええと・・・その・・・寝顔とか・・・見ました?」

「??ああ、ゆっくり寝てたな!」

「もうお嫁に・・・」

レキがずいぶん大げさな事を言い出し、下を向いてしまったので励ましておく。

「いやいや大げさだぞ。レキなら良い貰い手がいるって!」

そのときレキが決意したかのような表情でこちらを向き直した。あまりの勢いだったのでそのままレキが俺を押し倒すような格好になってしまった。

しかし決意した少女は止まらない。

「夢人さん!私・・・実は!!!!」

その瞬間レキの背後から俺に対する殺気が感じ取られた。

「へえ〜私が水を汲みに行ってあげているうちにあんたは何をしているのかな?」

そう言った葵はすでに魔法を放っていた。レキに当てずに俺にのみ直撃させる葵の腕はさすがだったが、このときの俺にとっては不幸以外の何者でもなかった。

10分後、意識を取り戻した俺はレキに俺と葵が意識を失った後、何があったかを聞いた。

「そうか。レキが一人で・・・すげえな!!!」

「それで・・・あのサイクロプスは?」

葵が真剣な表情で尋ねた。

「えっ？そこで倒したのですが・・・夢人さん達が処理したんじゃないんですか？」

「いや俺達は何も・・・まさかまだ生きていたのか!？」

「生きていたなら私たちに止めをさしていつてますよ。変わったサイクロプスでしたからね。存在ごと消えた可能性もあります。」

「そう・・・ね。」

レキの話に葵は安堵とがっかり感を持っているかのような様子だ。

「とりあえず、夢人さんは早く任務終了の報告へ行った方がよいのではないでしょうか？今日ですよ？任務の期間。」

「・・・まずい。村への報告は頼む！！俺は今から報告行ってくるから！」

そう言っただけで俺はその場を離れ、帝国軍に戻って行った。

「まったく忙しいやつね！」

「はい。・・・本当にあの人だけは・・・」

「まさか・・・『変幻の鋼夜』と言われてるあなたが幻影にかかっ

てやられるなんてね。」

暗い洞窟の中に一人の男と女がいた。

「あつちの姿だとろくに魔法も使えないんだ。仕方ないだろ？だが・
・あの少女。レキと言ったかな。あの魔法はおそらく・・・」

「おそらく間違いないわ。それに葵嬢も。ふふふ、やっと楽しくな
ってきたようね。」

「あの少年も楽しませてくれるといいな。今度はサイクロプスじゃ
ない本物の人間として会えるしね。」

「弱いあの少年はどうでもいいわ。私たちはこれから次の段階に移
るわよ。」

「では、俺はクロード様の所へ行ってくる。こちらのことは頼んだ
ぞ。」

「分かってるわ。後・・・5人ね・・・大丈夫、もう目星はついて
るから、今からいけるわ。」

五分後、洞窟に残っていたのはレキが最初に殺したサイクロプスの
顔がまるで鏡が割れたかのようにされた状態で残っているだけだっ
た・・・

第四話 討伐任務〜レキの幻影〜（後書き）

文章の分かりずらはヤバイですね。自分でも分かってます（汗
やっと思いまぐれで始めた討伐任務編が終了しました。

もしかしたら次回ちよつとした後日談的なのも書くかもしれません
が・・・

第五話 討伐任務〜任務報告編〜（前書き）

結局、書くことがなくて続いた討伐任務編です。

こゝ、今回こそ最後です！！

第五話 討伐任務／任務報告編／

帝国軍の支部に戻った俺は、また面倒なセキュリティチェックを終え、部隊長室の前まで来ていた。

「よし！じゃあおさらいしておこう。バカ部隊長には違反なく任務を遂行しました・・・と言うぞ。何が何でも葵達の同行がばれないようにしてやる！！」

今回のこの任務の条件には1人でこなすという条件がついていたのだ。もしばれるとどうなるかわからない。

ドアをノックし一応、礼儀正しく入室して中にいた部隊長に葵とレキが同行していたことがばれないように報告をした。

「以上です。任務は成功しました。」

「ご苦労だったな。ところで最近、葵とレキが訓練に顔を出してないらしい。どうやら2人で出かけているみたいなのだよ。おまえ・・・何か知らないか？」

「ばれてる？と内心焦ったが顔には出さなかった。」

「葵とレキですか？私はさっきまで任務に出てたので存じませんね。」

「しれっと言ってやった。」

「ははは。それもそうだな。今日はもうさがっていいぞ。」

「はい。それでは失礼します。」

部屋を出た俺は疲労感と安堵感により強烈な睡魔におそわれた。

「速攻、お家に帰りますか？」

家に向けて足を出して行つた。

部隊長室

「良いのですか！あの任務はあの男1人では絶対にこなせなかった任務。それをこなしたということはまちがいなく同行者を連れて行つてますよ！」

夢人が退室した後、部隊長室にいた部下たちは上司に意見していた。

「仕方・・・あるまい。上から正式に命令があつたのだ。」

「命令ですか？」

「極秘・・・のな。聞きたいか？」

「け、結構です！！失礼しました。」

帝国軍の任務には三種類の任務内容がある。

一つは夢人たちがこなした、『討伐任務』。

二つ目は討伐を主として行わない『通常任務』。

そして・・・三つ目は「極秘任務」。

その任務は帝国軍の裏がみえる。

任務を知り、条件を満たせなかった者には死が待っているそうだ。

「極秘任務、第十四番隊所属の『葵』と『レキ』について調査せよ」

「ただいま我が家」

任務報告を終えて俺はやつとゆっくりできると愛する我が家に帰ってきていた。

「今回の任務はすごい、いろいろあったなあ」

そう考え、思いついたのは女装させられたり、討伐対象に一瞬で負けたり・・・あれ？俺弱すぎじゃね？いろんな意味で。

「何かしないとまずいかな。でも・・・今日はシャワーでも浴びてさっさと寝よう。」

そしてシャワーを浴びていると何か玄関の方が騒がしいことに気づく。

「あ、葵さん、いきなり入って行くのはまずいですよお」

「何言ってるのよ！あいつ私たちに任務を手伝わせておいて村への報告を私たちに任せた後そのまま私たちのこと忘れてるわよ！間違いないわ！！」

「で、でもお・・・」

「いいから入るわよ！夢人！隠れても無駄よ！！」

御用じゃーと言いながら葵は踏み込んできた。

別に隠れてる訳ではないのだが・・・でも葵たちのことを忘れてなかったかを聞かれると微妙なところだ。

やはり今回のことで助かったのは間違いなかったたので浴室から上がり、タオルを巻いた後で脱衣所の扉が開かれた。後、数秒遅ければ完全に裸を見られていただろう。

「夢人！！やっと見つけ・・・たわ・・・よ？」

ドアを開いたのは葵だった。葵は口をパクパクしながらこちらを見ている。その顔はどんどん赤くなっていく。

「ななななな、なんで裸なのよ！は、早く服を！服を着なさい！！」

俺の裸（タオルを巻いた姿）を見た葵は驚き、後ろを向いたが向いた先には鏡があり、鏡越しにもう一度俺の裸（タオルは巻いてるよ）を見てあたふたしていた。かなり動揺してるらしい。

「タオルは巻いてるんだからそんなに気にするなよ。3歳児か？」
「そ、そうね。まったく気にする必要なかったわ。と、とりあえずあつちで待つてるから服を着て早く来なさいよ！」

まだかなり動揺してんじゃねえか。いつもなら、「誰が3歳児よ！」とか言つて魔法ぶつ放してくるのにあれば、バカにされたことに気づいてすらないな。

葵が脱衣所のドアを開けて出ようとしたときだった。

「葵さ〜ん。やっぱり勝手に入ってくのはまずいですよお。」

葵が出る前にレキが脱衣所の中を見た。

俺とレキの目が合いレキが目線を少し下にずらした。その視線の先には俺の裸（タオルは・・・以下略）。

レキは俺にお辞儀し、ドアを閉めた。閉めた後、ドサツという物音が聞こえドアを開け確認してみると・・・レキが倒れていた。どうやら気を失っているようだ。

「とりあえず寝かしてやらねえとな。あっ！鼻血出てる。貧血か？葵！手伝ってくれ。」

と、タオルを巻いただけの姿でレキを運ぼうとする俺に対し、葵は・・・

「あ・ん・た・は〜早く服着ろつて、言ってるでしょうがああああ

ああああああ！！！！！！！！！！」

なぜか魔法を撃っていた。もちろん俺は直撃。気も失った。

「や、やつちゃった・・・どうしよう・・・」

夢人の意識を飛ばし、とりあえずレキだけは別の部屋のソファへ寝かした葵は夢人をどうすべきかで悩んでいた。

「こ、このままほつとしてもいいけどお風呂上りでこんな格好・・・いくらこいつが馬鹿でもさすがに風邪引くわ。」

ここには葵しかないのに一人で自分を説得していた。

「そ、そうよ！風邪引かせたらその後が面倒になるのよ！それなら仕方ないわ！！はは、運ばないと・・・」

葵は恐る恐る夢人に手を触れ、魔法で少し自分を強化して持ち上げた。

「夢人・・・服の上からだとかわからなかったけど意外と筋肉あるわね・・・」

そして葵はある重大なことに気づいた。

いきなり男の家に上がりこみ、シャワーを浴びた後の男を魔法で気絶させ今現在その男をベッドへ連れていこうとしている。これはなんというか、いろいろまずいのではないだろうか・・・

「・・・ベッドへ、ベッドへ寝かせるだけ！風邪引かせないために！！」

何かの呪文のように葵は「風邪引かせないために」と連呼し続け夢人を部屋のベッドに寝かせる。

そのとき夢人の体をまじまじと見てしまう。

お風呂上りの濡れた髪、意外とあった筋肉。

長い付き合いをしている幼馴染みなのに知らないことがいっぱいあった。

「寝てるときは大人しくていいのにね」

くすりと笑い、葵は夢人の顔を覗き込んだ。
なぜか顔が赤くなっていく。

「もし・・・もしこのままこいつに・・・！！」

「何してるんですか？」

冷めた声とともに後ろのドアが開かれた。
レキの目が覚めたようだ。

「い、いやこいつのぼせちゃったみたいで、今ベッドに連れてきたところよー！」

「そ、そうなんですか！私ちょっと勘違いしちゃいましたよー」

「あははは、何言ってるのよー」

「ふふふ、そうですよねー」

二人して笑う姿をレキが部屋に現れたときに目を覚ましていた夢人はなぜかものすごい恐怖を感じたそうです・・・

第五話 討伐任務／任務報告編／（後書き）

途中で極秘任務について書いてますが別に次回から極秘任務編に入る訳ではありません。

えーと、次回は・・・考え中です。すみません。

文章の書き方も相変わらず下手です！すみません！！
これでも頑張ってます・・・

感想等がございましたらよろしくお願いします！！！！

第六話 英雄たちの街／ストロイデ／（前書き）

更新速度が落ちてきた・・・すみません！！

後、今回新キャラです。

第六話 英雄たちの街／ストロイデ／

おだやかな春の日。

俺のもとに一通の手紙が届く。

俺はいつも通りの時間、ちょうど軍の朝練が終了したときぐらいに目が覚める。

「ふああーあ、眠い・・・」

大きな欠伸をし、顔を洗って目を覚ました後、外へと向かう。
ドアを開けると何かを蹴ってしまう。下を向いて確認してみると手紙が落ちてあった。

「手紙？なんでこんなところに落ちてんだ？宛て先はと・・・」

手紙を拾い上げ、宛て先を確認してみるが・・・

「何も書いてねえな。・・・開けてみよう！」

こういうことは気になって仕方ないのだ。
自分の家の前に置かれてたものだし、別にいいだろうと思いい中身を見てみる。

手紙の最初には『拝啓、夢人様』と書かれていた。

「なんだよ。俺宛じゃん！これで何の心配もなく見れるな」

初めから手紙を勝手に見ることにまったく心配はしていなかったがそんなことは、気にしてはいけない。

「どれどれ。えーと、『拝啓、夢人様。この度、夢人様に私の気持ちを伝えたくて手紙を書きました。私は照れ屋なので面と向かって呼び出すのがとても恥ずかしいので手紙にさせていただきました。どうか明日の正午に噴水広場近くの森まできていただけないでしょうか？あなたが来てくれるのを待ってます。』……こ、これは！！まさか！！！！」間違いない。この文面は……
どんどんテンションの上がってきた俺は、どんな子が書いてくれたのかを想像していた。

今どきラブレターで呼び出すような子なのだ。きっとおしとやかで心の優しい人に違いない。

「そつだ！！明日寝坊しないように早く寝ないとし！」

そう言っただけ俺は床についた。

ちなみに朝起きて間もない時間だったが一分も経たないうちに眠ることができた。

しかし……眠ってからおよそ五分くらいだっただろうか。通信機が爆発するかのような音で鳴り始めた。

止まることなく鳴り続ける通信機。それを手にとって、通話ボタン

を押した。

「おっ！やつとで・・・」

声が聞こえた瞬間、切ってやった。

「・・・電源も切っておこうか」

電源も切っておいた。今度こそ寝ようと布団に入ったときだった。

ガシャーン。・・・窓が割られ、勢いよく一人の男が入ってきた。

「ひどいで。せっかく暇しとる夢人ちゃんのために遊ぼう思て、電話したのにすぐ切ってしまうやもん。そりゃ、窓から入ってまうわあ。」

「はあ。油断してたよ。まさか家の近くにいたとは・・・ちよつと待ってくれ。たしかこの辺にマシンガンをおいてたはずだから。」

「待ち！！そんなもんだしてきてどうするつもりや！！！」

「えっ！おまえマシンガンの使い方知らなかったっけか？見せてやるよ。こう使うんだ。」

銃口を男に向け、ロックオンした。

「ま、待てー！？悪かった！！わいが悪かったから！！！」

「冗談だ。」

「今のはまったく冗談に見えなかったよ・・・」

そんなに本気で言ったつもりじゃなかったんだけだな。

「それで・・・なんのようだよ、『カイン』。」

「だから、夢人っちが訓練とわいと、任務サボって暇しと思つて遊びにきたんや。」

「俺はいそが・・・おい、カイン今なんて言つた？」

「えっ？だから訓練とわいと、任務サボって暇しと思つて遊びに・・・」

「任務・・・だと？」

「あれ？もしかして忘れとつたん？今日は街の巡回やで」

「ま、まずい！！これ以上、任務をサボると減給だ！！い、行くぞカイン。」

「ええー、わいもう遊ぶ気まんまんなんやで！」

「マシンガンで逝つとくか？」

「喜んで行かせていただきます！！！」

そんなこんなで巡回へ。今日の巡回地は帝国軍本部がある街、『ストロイデ』だ。

夢人家からストロイデまではそんなに距離はない。夢人とカインは軍用バイクで街へ向かう。

「夢人っちは相変わらずその化け物バイクなんか？？」

「ん？ああ。力は半端じゃないからな。慣れれば良いバイクだよ」

夢人のバイクは改造されたもの。なかなかコントロールも効かないが早さだけはある代物なのだ。

「そんじゃ、行きますか!!」

夢人はバイクに跨りエンジンをかけ、ものすごいスピードでストロイデ向けて発進していった。

英雄たちの街〜ストロイデ〜

「到着つと・・・あれ？カインがいない」

カインのバイクは一般的なもの。もちろん夢人のようなスピードなど出るはずもなかった。

カインは夢人から五分遅れで到着した。

「は、早すぎるわ、夢人っち。もうちょいわいのことも考えてえな。」

「悪かったよ、とりあえず早く巡回行こうぜ。」

ここ、ストロイデでは月に何度か各支部に交代で巡回の任務の命令が下される。巡回といってもそのほとんどは民のためではなく、帝国軍のためなのだ。

この街には天上人から世界を救った五人の英雄のうち二人が帝国軍本部に住んでいるらしい。外部からの敵が怪しい動きをしていないかを一般人のフリをして探るのが任務内容だ。

この街の兵士だと顔がわれていて動きにくいが他の支部の兵士たちなら難なく探れるという訳だ。

「カイン、任務の内容には何か書かれてるか？」

「そうやな」。なんや最近、街の隅っこにある酒場で集団行動しと

るやつがおるらしいわ。

こいつらについて探れってことらしいわ。」

「時間のかかりそうな任務だな・・・」

「そうやな。とりあえずゆっくりやっていこうやないの!!」

「馬鹿か？早くしないと帝国軍本部に攻め込まれるだろ！さっそくその酒場とやらに行くぞ！」

ゆっくりしたさそうなカインを引っ張って夢人は酒場へ向かった。

酒場はボロボロで本当に営業しているのかが不思議なほどの雰囲気だ。

人気もない。

「ホンマにここがやつらのアジトなんかいなゝ人のいる気配はないで？」

「確かにホントに・・・!!人気はないな」

そついつて夢人はカインの肩に手を置き、アイコンタクトした。

最初何をしているのかわからなかったカインだったがすぐに意味を理解し小さく頷いた。

「カイン、タバコ吸いたいんだ、『火』もらえるか？」

「まかせてえな。」

カインは夢人の要望通りに魔法で手から小さな火の玉を出し、そしてそれを・・・自分の背後目掛けて放った。

その後すぐさま、夢人が服の中から短剣を取り出し臨戦態勢に入った。

「カイン！援護してくれ!!」

「任せとき！この人数なら二人で余裕や」

覆面をした人間が二十人近くいた。

カインはもう一度火の玉を、しかし今度は大きな玉を作り出し撃ち続けた。

夢人は短剣でカインの魔法受けた相手に斬撃を加え次々と仕留めていく。

「カイン。一匹残すぞ!!」

夢人の支持通りにするためにカインは魔法を一時止めた。

遠距離魔法で闘うと全滅させてしまう恐れがあったのと自分も近距離で闘えるようにするためだ。

カインは両腕に炎を纏い、近づく敵を片っ端から気絶させていく。

カインの魔法は『火』。遠距離型の魔法も使えば近距離用の魔法も使える。

奇襲をしかけようとしていた奴らは残り一人となった。

「さうて、おまえらの目的について聞かせてもらいましょうか・・・とそのまえにお顔を拝見」

「!よ、よせ。やめろ!!!」

夢人が覆面をはぎ取ったときその中から現れたのは・・・ものすごい美少女だった・・・

第六話 英雄たちの街（ストロイデ）（後書き）

文章の書き方はころころ変わります。読みづらくてすみません！！

後、手紙の件についても今後ちゃんとやります。

とりあえず今回からは別のシリーズです。一応つながってくる？と思います。

後、夢人はタバコ吸いませんから！

葵とレキは出てくるのかな・・・

感想がございましたらよろしく願いします。

第七話 キングダム（前書き）

また投稿速度が・・・すみません！

今後もどんどん落ちていくかもしれませんが頑張りますので見てやってください！

第七話 キングダム

「・・・女？」

覆面を取ったとき中から出てきたのは銀髪の少女だった。

「は、はなせっ！」

抵抗してくる女を無視して、とりあえず酒場の中へと全員を連行した。もちろん全員、中にあった縄で縛った。

「それで・・・目的は何だ？ 集団でこんなさびれた酒場に集まって何かしてかそうとしているとしか思えないが・・・」

俺の問いかけに女は一切の反応しめそうとしない。

これはじっくりいくしかなさそうだな。

長期戦の前に喉を潤すか・・・

「カイン！ 水入れてくれないか？」

「ええよ。どうぞ！」

カインがコップに注ぎ俺に水を渡してきた。

俺はそれを一気に飲み干し・・・そして・・・酔った。酒にはそんなに弱くないはずなのだが、どうやらカインがコップに注いだのは水ではなく、その辺のビンの中にあっただお酒だったようだ。

俺が自分を保てている間にカインの股間を蹴り上げてやった。もちろんカインの意識はサヨナラだ。

最後にカインが入れたであろう酒ビンを見てみると昔、どんなに酒の強い男でも酔わし、あまりのきつさに販売を禁止された酒だった。

たしか中には魔法液が入ってる酒も・・・効力は・・・
そこからの俺、夢人はまったく別の夢人になっていった。

魔法酒『ルイン』

水を飲んだ男が急に仲間を蹴り上げたと思ったら、意識を失い倒れてしまった。

よくわからないが仲間割れをし、二人とも意識がない。

これはチャンスだ。

捕まっていた少女は、縄を解こうと辺りを見まわした。

ここは自分たちのアジト。どこに何かがあるかは把握できている。

後は気付かれないようにナイフの置いてある棚まで行くこと・・・

少女は静かに立ち上がり、倒れている相手に気付かれないように慎重に棚へ近づき後ろに縛れている手でナイフを持つ。

「よし！後は・・・・・・・・切れた！！！！早くみんなを・・・」

縄を切り、私が仲間の方を向いたとき目の前にさつき水を飲んで
いた男が立っていた。

男が手を前に出し、こちらに顔を向けた。

「しまった！この距離だとやられる」と思い、反射的に目をして
しまう。

しかし・・・いつまでたっても男からの攻撃がこない。恐る恐る目
を開けると開けた瞬間、男が私に覆いかぶさってきた。
最初、攻撃かと思った私だったが男の真意は違うようだ。

「綺麗な髪だね。それに手触りも最高だよ。」

いきなり髪を触ってきた！！？

一般人を装った兵士かと思っていたのだが、ただの一般人なのかも
しれない。

普通の兵士が任務中にこんなことをしてくるはずがない。

「どうしたんだい？ああ、緊張してるのかい？大丈夫だよ」

うん。やっぱり一般人だ。兵士してくる質問じゃない。

でも、この体勢はまずい・・・う、動けない・・・

仕方ない。一般人を殺すのは心苦しいけどこの場合、正当防衛って
ことで。

このナイフで・・・ナイ・・・フで・・・ナイフがない！！！！

「はは、君みたいなかawaii女の子がこんな危ないもの持って顔に
傷が出来たらどうするのさ。僕が没収しておくよ」

あゝやばい・・・かな。動けないし・・・

私このまま・・・その・・・
考えると涙が出てきた。

すると、男が「強引すぎたね・・・ごめんよ。大丈夫かい？」と言
って、手を差し伸べてきた。

私はその男があまりにも自然に微笑みかけてきたので、流れでその
手を握り返してしまった。

立ち上がり、私と男はイスに座った。

「それで・・・君の名前はなんていうのかな？」

「えっ！えっと・・・『リース』です・・・」

しまった！また流れで答えちゃった。私捕まってるのに・・・

「リースちゃんか。良い名前だね。」

ニコリと笑う男はいつたい何を考えているんだろうか・・・

最初は多勢で奇襲した私たちを見事に倒したが、その後仲間を倒し
現在私を狙っている。別の意味で・・・

この男は私のことが好き、なのだろうか。いやいやまだ出会ってか
ら一時間も経っていない。普通そんなので人を好きになるものだろ
うか。

そこで、はっとした。まさか・・・この男・・・私に一目惚れした
のだろうか。それならこの展開に説明がつく。間違いなさそうだ。
どうしよう。ここに、告白なんてされてしまったら・・・いや、で
もこいつは仲間を傷つけた。

そこでまた、はっとする。仲間を人質に・・・なんて言われたら・・・

悶々と考えていた私に対してついに男が動き出した。

「おっと、そろそろ僕が僕でなくなる時間のようなだ。」

「？なんのはな・・・！！」

なにかが起こった。しゃべれない。

でも、心地良かった。

初めての感覚だけでもしかしてキス・・・されてる？

そして男は名残惜しそうに唇を離した。

それと同時に男は意識を失って倒れてしまった。

私もその場に座り込み、唇に触れた。

まだ温かい感覚が残っている。顔が熱い。

でもここで座っている場合ではない。

逃げるんだ！私はまだ捕まる訳にはいけない。

しかし気を失っているみんな連れて逃げるのは無理だ。だからって見捨てられない。

どうしたら・・・

「リー・・・ス。リース。」

「！！ボス！目が覚めたんですね！！！」

「ああ、状況は？」

「はい。仲間割れでさっきの二人はそこで倒れてます。みんな起こせば逃げられます！」

「いや・・・一人で逃げるんだ。」

「なぜですか！！もうすぐみんな意識を取り戻す頃です！」

「さっきの戦闘でほとんどの奴らが負傷している。それに・・・外から数人の気配がする。おそらく帝国軍の奴らだ。突入してくるの

は時間の問題。おまえだけでも逃げる！俺が時間を稼ぐ。」

「私も一緒に闘います！」

「馬鹿なことを言うな！おまえが捕まればすべてが終わる！！いいから逃げる！！・・・未来のために」

「わかり・・・ました。」

私は涙を拭いボスを見た。

ボスは傷だらけの体で立ち上がり表のドアを開けた。

「来い！帝国軍のゴミどもがぁ！！俺が盗賊団『キングダム』のボス、バルバード・クルードだ！！！！今から帝国軍に戦争を仕掛ける！どんなやつでもかかって来い！！！！！！」

私は裏門から脱出し、そして静かに頭を下げ裏の森を走り抜けていった。

任務報告書『今回の問題は我らが帝国軍に対し、不穏な動きを見せていた盗賊団がいたことで起こった問題。しかし、盗賊団のアジトを襲撃した結果、キングダムのボス、バルバード・クルードが単身で我々に特攻。火の魔法で判別不能なまでに焼き殺してしまう。し

かしその後、中にいた他の盗賊団のメンバーを捕縛。拷問にかけた後に全員処刑した。拷問の結果、キングダムにいた全員を処刑できたことも分かったのでこの事件はこれで閉幕のようだ。』以上が報告書。盗賊団壊滅任務責任者、カイン・アルベラーが担当いたしました。

第七話 キングダム（後書き）

いろいろある回です。今回も毎度のことながら当初予定していたのと話が変わってしまっていました。

時間空けて書くと言章の書き方も変わります。考え方も変わります。すみません。できるだけ一氣に書けるようにします。

感想があればお気軽に書いてください!!!!!!

第八話 手紙の続きは！？（前書き）

遅くなってしまうかもしれませんでした。活動報告でも言ってますが現在パソコンがありません。携帯で完成させました。しばらく携帯でするので遅くなるかもしれませんが、よろしく願います！

第八話 手紙の続きは！？

「ずーん」という効果音に包まれている夢人は自宅の椅子に座り、机に頭を伏せていた。任務終了から、はや1日。

「誰だよ・・・あれ。しかもキスまで・・・」

昨日の午前中に行った任務で失敗？してしまい夢人は完全に意気消沈。何のやる気もなくなっていた。

「まーまー、そない気分落とさんと一応もとの任務自体は成功したんやし！パーツとやろうやあ！！」

カインの言っている通り、大元の任務は成功。めでたく帝国軍に仇なす盗賊団のメンバーは全滅したという結末だ。しかし夢人は納得していなかった。「なぜ全滅させる必要があったのか」ということに対してだ。

「なあ、おかしくないか？証拠も取り調べもなしに部隊1つを出して全滅させるなんて・・・」

「不安要素は早めに潰す。大きな団体を指揮するもんとしては、当たり前前か。俺たちにも部隊を出すことを隠してか？」

「敵を欺くにはまず味方からって言うやろ？気にしたらあかんよ」

「そういうものですか」 「そういうものですよ」

ズズーっとお茶を飲み、いろいろあつて疲れた体を気遣う。

「そついや、夢人っちはこれから用事とかあるん？ないんやったら遊ばへん？」

「ん？もうすぐ夕方か・・・ゆうがた？」

パンツと机をたたき、身を乗り出す。そして、「正午は！？」と叫んだ。「しょう？？そんなもんは四時間も前に終わってたで？なんかあったんか？・・・って何しとるんや！？いきなり服なんか脱ぎだして。ま、まさか！いやいやわいにそんな趣味はないで！」「なんの話だよ！とりあえず今日はもう帰れ。」「あかんで・・・それはあかんで・・・」

話を聞いていないカインの顔面に拳をいれて気を失ったカインを近所の川へ流しておく夢人の姿はさすがしかった。

しかし、そんなことに時間を費やしている場合ではない。手紙の約束の時間は正午。すでに四時間は経っている。あまりにも昨日の出来事が大きすぎてこんなステキイベントを忘れてしまっていた。すでにいない可能性は高いが行かない訳にはいかない。着替えだけ済まし、すぐに約束の場所へバイクで向かった。

途中、ふと川を見ると赤色の液体を流す物体を見つけたらしいがあまり気にはとまらなかったそうだ。

噴水広場はバイクで10分くらいの場所。その近くの待ち合わせ場所の森は森というよりは、自然が多い公園だ。若いカップルたちのデートスポットのようになっていて。告白したりするためには、まさにうってつけの場所。しかし、すでに約束の時間からは四時間以上は経っている。まだ暗くなってはいないがすでに夕方。

「さすがにもういないよね」

消え入りそうな声で呟き、近くにあったベンチに腰掛けた。

「はあ、チャンス逃したか・・・」

「夢人さん・・・ですよね？」

後ろから誰かに声をかけられた。まだチャンスはあるようだ。夢人は小さくガッツポーズし振り返る。

「遅くなってすまない。少し用事が・・・！！な！おま・・・え・・・」

夢人は振り返った瞬間に頭に強い衝撃を受け、そのまま意識を失った。

「さあ、ゲームを始めようか！」

暗くなった公園に女性の声が鳴り響く。

「次の準備をしないとね。」

夜、葵の家に手紙が届いた。送り主が夢人と書かれていたのを見た途端に葵は部屋にダッシュで戻り、中身を確認した。

『2人きりで話がある。今すぐ家に来てくれないか？』
わざわざ手紙で、しかも自宅で直接言いたいことがあるらしい。何かを期待してしまう。顔が熱い。葵は首をぶんぶん振って一息置くために、深呼吸した。

「し、仕方ないわね！呼ばれて無視しちゃったら夢人がかわいそうだから行って・・・あげるわよ！！」

誰に対しての言い訳なのかまったく分かりません。

「なぜかしら。今誰かに文句を言われた気がするわ」

空気の気配が読める葵だった。

同時刻、レキの家。お風呂上がりのレキは、バスタオルを巻いただけの姿で部屋のソファに座っていた。

「うう、まずったなあ。洗濯もの乾かすの忘れてたよ。もう誰か来たらどうしよう・・・」

こういう悪い考えはいつも当たってしまうのがレキという少女なのだ。玄関から物音がした。そして呼び鈴が鳴った。レキは呼び鈴にビクツとして衣服を探すが今あるのは洗濯機の中で回っていたり、干されていたりという状況。いよいよ追いこまれていたことに現実味を感じてきたところで再び、呼び鈴が鳴る。これ以上待たせるわけにはいけない。せめてお客さんが女の人であることを願って、扉

を開けた。ゆつくり外にいる人を確認してみたが、そこには誰もいなかった。代わりに地面には、一通の手紙と服が置かれていた。

差出人は夢人。内容は、『大事な話がある。今すぐ家に来てくれな
いか？』

「・・・ええー！！ゆ、夢人さん来てたの！？しかも服が置かれて
るってことは・・・私の事情がバレてたってことだね・・・つ、
つまり見られちゃった・・・のかな？」

そう考えると気を失いそうになったが手紙の内容を思い出し、踏み
とどまった。

早速、置かれていた服に着替えて見ると、あることに気付いた。

「胸のサイズが・・・この服、そこだけ大きい。」

嫌がらせ？嫌がらせなのかな？と一瞬だったがレキの黒いオーラが
溢れ出す。でも考え直してみる。こういう服を置いていくってこと
は夢人は胸の大きな人が好きなのだろうか・・・と。

意気消沈しそうだったが手紙の内容を思い出し、再び踏みとどまる。

「早く、行かなきゃね」

そして、レキは夢人の家に向かって行った。

夢人の家の前に1人の少女が現れた。葵だ。葵は今まで着たことないような女の子らしい服装だった。といっても普段着が兵士の服装やらシンプルにデザインされたパジャマなどなど。

少し女の子らしくヒラヒラのスカートを履いただけでギャップがでてしまっている。

本人は顔を真っ赤にして玄関の前に立った。前にここへ来たときはたしか怒鳴り散らして来ていたが今回は違う。白でコーディネートされた服装からは清楚なイメージをだしている。おしとやかに呼び鈴を鳴らす。

心臓の鼓動がはやい。緊張でいっぱいなのだ。彼は『似合っている』、『かわいい』と言ってくれるだろうか・・・もし、全然似合っていなかったら・・・そう考えると自然と下を向いてしまう。首を横に振り、意を決して前を向いた。

「来るなら来なさい！準備は万端よ！！」

5分後。

「シャワーでも浴びてるのかな・・・もっかい鳴らそう」

10分後。

「あいつ！呼び出しておいて何で出てこないのよお！！」

15分後。

「もういい加減出てきてよ・・・お願いだから」

20分後。

「強行手段でいつてやるうー！！」

そう言って葵はドアノブに手を置き回してみた。するとガチャッと扉が開いた。

「あれ？鍵かかってない。不用心ね。は、入るからね！うひあああ
あ！！」

玄関に一步入ったところで肩に手を置かれた。緊張していた葵は驚きのあまり前に向かってこけてしまう。

「ご、ごめんなさい！でも葵さんもう夜ですよ？何・・・してるんですか？」

「へっ？い、いやっ夢人の奴がさ、呼んできたから仕方なくよ」
「えっ？葵さんも？」

その言葉で2人のテンションは急激に冷めていった。愛想笑いしながら過ごした十秒は一年くらいの期間に感じたらしい。

「あ、葵さん。可愛い服ですね・・・」

「あ、ありがと。レキも似合ってるわよ・・・」

服の褒め合いはお互いタブーらしくさらに場は気まずくなっていく。

「入りましょうか・・・」

「そうね、入りましょ」

家の中に入っていくリビングの椅子に座る。ふと机の上を見ているところには手紙らしきものが置いてあった。

手紙には、ただ一言。

「滝沢夢人を誘拐した」

第八話 手紙の続きは！？（後書き）

携帯での投稿なのでおかしい点があれば教えてください。すぐ修正します！

えっ？内容が変？それはいつものことです！

感想等も待ってますのでよろしくお願いします！

第九話 夢人誘拐

「何よ！あいつ！ー！こんなしょうもないことするために私たちを呼び出したの！？帰るわよ、レキ！」

「えっ？でもこれ夢人さんの字じゃないですよ？」

「そんなのなんとでもなるわよ！」

そしてそのときどこかで通信機が鳴った。

「通信機の音？風呂場の方からね。きっと夢人からだわ。文句言ってきてやる！！」

葵は通信機に対応する前から文句を言いきりながら風呂場へと向かっていった。

「あ、葵さん！落ち着いて下さいよお・・・？」

葵の後について行こうとしたレキは何かを踏んでしまった。

「何だろ。何か『ぐにゃっ』とするもの・・・これ、は！！」

風呂場で鳴り続けている通信機を手に取りボタンを押した。

「夢人！どういうつもりよ！もしも暇だったからなんて言ったら張り倒すからね！！」

『滝沢夢人は預かった。返してほしければ今すぐ台所にある隠し扉の中に入れ』

「面倒なことさせるんじゃないわよ夢人！いいから姿を見せなさいよ！」

「あ、お……いさん。こ、これ！」

レキは泣きながら、それを両手で持ち葵に見せた。

それは手。とても作り物とは見えないその手はまさしく本物そのもの。怒鳴っていた葵もその現実に驚愕し、思わず力が抜け通信機と共に崩れ落ちた。

『こいつを返してほしければ今すぐに入れ。すでにこの家は私のものだ。お前たちがここからできることは不可能だからな』

通信が途絶え、静寂が訪れた。しかし、それをレキの魔法がかき消した。レキの魔法で通信機が細切れになる。通信機の残骸を踏み潰し、目つきを変えた。

「私は行きますよ。葵さん……いつまで下を向いてるのですか？」

「わた……し、は……」

葵は前を向き通信機の残骸を蹴り飛ばす。

「行かないはずないでしょ！簡単に捕まった夢人の顔を殴るまではね、この気持ちは晴れないんだから！！」

「それでこそ、葵さんです。じゃあ、私は誘拐犯さんを殺しますね」

「あつ、待ちなさいよ！私が殴ってからにしてよね。二百発ほどやるから」

2人は結束が深まった！？

台所はまったく別の家のようになっていた。食器棚の裏からは銃のようなものが見えている。さらにガス台からは火というよりは炎が噴出されている。いつ周りに引火してもおかしくない光景だ。そんな部屋に入ってきた葵とレキはまず葵の水魔法で炎を消そうとしたがガス台ごと水圧で破壊。レキは食器棚の後ろの銃を破壊しようと空気を操る魔法で空間を圧縮。食器棚ごとぺしゃんこになった。その調子で台所を破壊。すると床に一台のテレビが置かれていることに気がついた。

「これはどっちが壊す？」

もはや、破壊以外の選択肢の持っていない葵は自分の右手に魔力を練り始めた。

「待って下さい。何かのヒントを教えてくださいませんか」

するとテレビの電源がついた。テレビに映っていたのは足。完全に切り離された状態でただ足だけが映されている。そして一人の人間がその足を画面上から消す勢いで蹴り飛ばした。

テレビの画面上に現れたその人間は般若面をかぶり、自分という存在を隠しているかのようなうだ。

『やあ、よく来たわね。実はね、これから続いていく部屋のどこかに一つずつ鍵を置いたんだ。鍵は全部で三つ。入口は君たちが壊した冷蔵庫の後ろにあるからね。それじゃがんばっ・・・』

レキの風の刃はテレビを半分に斬った。

「じゃ、行きましようか。葵さん」

冷蔵庫の裏にあつた扉を開けると階段が下へ続いていた。その階段は不気味なほどの薄暗さ。所々にランプは取り付けられているものの足元が少し見えるようになっていくくらいである。

「よくもまあこんなもの造つたわね」

「いえ・・・おそらくこれは元からあつたものですね。扉を開けてから建物の年代が完全に変わりました。たしか夢人さんってこの家をおじいさんから引き継いだ物ですよな？」

「引き継いだつて言うよりはおじいさんが勝手にいなくなつちゃつたから自分しか管理出来る人がいないつてだけなんだけどね」

（それにしてもいつの年代の建造物なのかわからない・・・でも、やっぱり・・・）

「どうしたの？レキ」

「な、何でもありませんよ！早く行きましよう」

一つ目のの部屋に到着し木で造られた扉を開いた。葵とレキの目に一番最初に飛び込んできたものは、顔だけ魚の人類・・・いや魚類が二足歩行で歩いている姿だった。2人は一言も発することなくすぐさま扉を閉じ、目をこすった。ほっぺもお互いでつねりあい夢じやないことも確認。深呼吸し、もう一度扉を開いてみた。もちろんこんな短時間での衝撃的な魚人間の存在は消えていなかった。

「うん？もう来てたのか！私こそこの木の部屋の番人・・・サバン

だ！」「よし！じゃあレキ、スパツと風で殺っちゃって」

「任せてください。刺身にしてあげますよ。食べれませんけどね」

レキは右手に風をつくりだし、魚みたいな人間目掛けてカマイタチを放った。しかしカマイタチは魚人間に当たることはなかった。魚人間は右手を前に突き出している。その手には、風。

「なるほど！君も風を使うのか！奇遇だね。私も風を使うんだ」

「風使い！？レキ以外の人は、初めて見た・・・」

葵は驚愕している。風を使える者はかなりめずらしいのだ。巨大な勢力を持つ帝国軍にも風を使って戦える者はレキを入れても5人にも満たない。

「久しぶりだ。この感覚。風使いとやるのは十年ぶりだよ」

「関係ありません。相手が誰であろうと倒しますよ！」

レキは右手に再び風を集め、それを圧縮。球体にしそれを魚人間へ投げた。

「空気の圧縮球か？スピードが遅すぎるな。そんなものは当たらんぞ？」「ご心配なく。当てたかった訳ではありませんから。」

にこりと笑みを浮かべ開いていた右手を閉じた。そのときノロノロと進んでいたレキの圧縮球が爆発。爆発によって視界も悪くなり魚人間の姿は見当たらない。レキは短剣を構え接近戦に備える。やがて視界が元に戻り中の状態が見えてくる。

「あゝあ、この魚の顔、作るの大変だったのになあ・・・仕方ない。今は撤退かな？」

「逃がすはずないでしょ！」

再びカマイタチを放つがまた風で相殺。

「また会えるとうれしいよ。小さな風使いさん」

視界が完全に晴れたときにはさつきまでの姿はなく薄っぺらくなつた魚の顔だけが落ちていた。レキは悔しそうに歯を食いしばる。

「レキ、今は早く先に進むわよ」

「そう・・・ですね」

少し不服ながらも、今は夢人の救出が最優先と追跡しようと考えていたのを諦める。レキは魚の顔と一緒に落ちていた鍵を拾い上げ、次の部屋の扉を開けた。

「う、うん？どこだ？ここ・・・」

「自分の家がわからない？」

「な！？おま、うわぁ！」

「あら？かわしたら危ないわよ？」

「かわさなきゃ、また気絶するわ！」

般若面を被った人間はどうやら女らしい。木刀を手に持ち、夢人の頭を狙い続けている。

危険すぎる。そう判断した夢人はその女から距離をとる。

「悪いがこの場から逃げさせてもらおうよ！」

「はあゝ。あなたは今、捕らわれのお姫様・・・もとい王子様。助けてくれるまでは大人しく待ってなきゃだめなのですよ」

・・・なんだこいつ？やばすぎる。お姫様？王子様？やっぱ逃げよう。

夢人は考えをまとめ手頃な武器を探し始めた。すぐに机の上にナイフが置かれていることに気付く。立ち上がりナイフに手を伸ばそうとした。

どうしてだろう？伸ばしたはずの手が視界に入ってこない。もう片方の手で見えてこない手の方を触ってみる。触れた感覚がない。恐る恐る見てみるとそこにはいつもあるはずの自分の手の存在はなかった。

「ふふつ。片手で私から逃れられますか？逃げるっていつでもこの地下はあなたの家の一部だけだね」

無邪気に笑う般若面の女。しかし夢人はあることに気付く。

「おまえ・・・何者だ？なぜこの地下の存在を知ってる？」

「どうしてだろうねゝ。お姉さんちよつとわからないなゝ」

片手をなくし、変な女に捕まった夢人は溜め息しか出てこなかった。

第九話 夢人誘拐（後書き）

遅れに遅れた投稿となつてしまい申し訳ないです。
文章もいろいろおかしい・・・途中、足も無くなった感じのシーン
がありますがそれはミスではないです。

感想等がありましたらよろしく願いします。

第十話 解放

葵とレキが2つ目の部屋に入ると1人の男が部屋の中央くらいに立っていた。

夢人と同じ黒髪で整った顔立ちをしている男だ。男は2人に対してあまりにも無防備に立っていた。

「あなたは他の連中のように顔を隠さないのですか？」

「馬鹿2人と一緒にするな。素顔で構わない」

「そうなのですか？私のはてつきり変人で卑怯者の集団が夢人さんを誘拐したのだと思ってましたよ」

「その通りだな」

挑発には乗ってこないか・・・この男・・・やっかいなのが出てきましたね・・・

レキは葵に慎重にいこうと言おうと後ろを見たが・・・誰もいない？

「クールにしてんじゃないわよ！」

効果音としては『ドンッ！』という表現が似合いそうな感じで葵が前で仁王立ちしている。

「あ、葵さん！もう少し様子を！！」

「何言ってるのよ！こっちは人質がいるのよ。こんなやつちやっちやと倒すわよ！」

レキからはため息がでる。この人はいつもこうして気合いで押し切るうとする。でもなぜだろう。不安にならない。不思議だ。クスツと笑い大きく一歩前に出る。

「準備はいいですか？ 葵さん」

「当たり前でしょ。いくわよ！」

まず葵が水を使つて一本の刀を造り出す。未だに構える素振りすら見せない男に刀を向ける。そのまま男に向かって走り出す。男はまだ構えない。そして葵の刀が男を貫いた。しかし葵には手応えがまるでなかった。刀は確実に腹を刺している。まさか幻影？と考えたが魔力を使っている様子はない。

「不思議そうだな。教えてやろうか？」

「後ろがから空きですよ！」

レキが後ろからカマイタチを当てる。今度は振り向くこともなくカマイタチを消し去った。

「考えが甘すぎるな」

葵が刺しているままの状態です。男は刀を消した。そして動きが止まった葵を蹴り飛ばした。

「げほっ。やっぱいなー。レキ、どうしょっか？」

「魔法が効かないなら、接近戦です！」

短剣を抜き、レキは男に向かって斬りかかった。

「普段から魔法に頼るお前たち魔導師が俺に勝てるはずないだろう！」

難なくかわされ、レキも蹴り飛ばされた。

実力が違いすぎるのだ。これほどの力があれば帝国軍でも戦闘部隊の隊長になれるだろう。今の自分たちでは勝ち目がない。どうすれば良いのかもわからない。レキは静かに目を閉じた。周りからは物音1つ聞こえな・・・ハーツ!!

聞こえた。葵が戦っている。どうやら魔法で攻撃してるらしい。あの男には魔法が効かないのはわかってはいるはずなのに。それでも諦めていなかった。やつぱりすごい人だな。私だけ負けてられない。立ち上がり、前を向く。絶対に諦めない。そう決意して・・・

「ねーねー。腕、返してほしい？」

「返してほしい？っておまえらが切り落としたら。腕だけ返されても手の打ちようがねえよ」

「馬鹿ねー。腕なんか切り落としてあなたが出血多量で死んじゃったらどうするのよ！責任なんか私にはとれないわよ！！」

？今の言葉おかしくないか。捕まっている夢人は違和感を感じていた。未だにこいつの目的はわからないが自分を殺すつもりはないらしい。それどころかなくなった腕を返してくれるようだ。それに責任？誰かからの命令を受けての行動の可能性が高い。つまりその命令がないかぎり殺すことはできないはず・・・ならば！

「腕を戻せるなら戻してくれ。これじゃ不便だ」「そうだよーねー。

『アグール』？いるー？」

「ここにいるが？」

「この子の腕あるよね？出して！。あれ？私の上げたりアル魚のお面は？」

「せ、戦闘中にな・・・すまない」

「今度は大事にね！」

「あ、ああ！必ず！！」

なんだあのアグールってやつ。この般若女と話するとき、やけに緊張してるな。そういう仲なのか？

夢人は頭の片隅に記憶しさっそく腕の治療にはいった。

その光景はまさに一瞬。般若女が俺の切り離されていた腕を切り口につける。ただそれだけで元通りになった。

「すげーな。どんな魔力だよ」

「いやすごくないよ？私が魔法で切り離してたのを魔法で戻しただけだから！」

「体をバラバラにする魔法・・・分解か？」

「うん！その通りだよーさてじゃあそろそろ本題に入ろうかな？」

「何が？目的だ？」

「ふふつ。アグール。その子を抑えて」

「わかった。『風縛り』」

「・・・何をするつもりだ？」

「薬を飲んでね」

「てめっ・・・何を飲ま・・・」

思考が鈍る。なんだ？ここ、こんなに暗かったっけ？ああ駄目だな。闇が俺を招く。もう何も考えられない。

「成功ね。後はあなた次第。私に見せて。忌むべき力を・・・」

「がむしやらに魔法を撃つても俺には効かないぞ」

葵とレキはただひたすらに魔法を打ち続けた。魔力はすでに残り少なかった。

「もはや俺にすら当たらなくなってきたな。そろそろ諦めろ」「ハア―ハア―。諦めるですって？そう簡単に諦めるはずないでしょ！それに勝てる戦いを諦める必要はないわ！」

「戯れ言だな。魔力も体力もないお前たちがどう逆転するのだ？俺はたかが魔法で抑えられることもないぞ」

葵とレキは笑みを浮かべ2人とも手を片方上げる。

「気にしないでくださいよ。今までと同じたかが魔法です」

2人は魔法を撃つ。狙った場所は天井。そして・・・男の頭上に瓦礫が落ちる。

「がむしやらに撃つだけの魔法じゃないですよ。たかが魔法をなめないでください」

男は瓦礫の下に埋もれてしまったようだ。姿が見えない。

「行くわよ、レキ」

「鍵はどうするんですか？」

「このドア開いてるわ。施錠を忘れたんじゃない？」

「キヤア——！！！！！！！！！！」

部屋から出ようとするのと奥の部屋から悲鳴が聞こえた。すると瓦礫に埋もれていた男が瓦礫の中から現れた。

「
「
シイナ！
」
」

男は葵とレキの横を駆け抜け悲鳴の方へと走っていった。

「相手側にアクシデントが起きたみたいですね。今のうちに夢人さんを救出しましょう」

「そうね、急ぐわよ」

葵とレキは急いで奥へと向かい奥の部屋の中を見た。最初それがな

それは周りに禍々しい闇を従え、宙に浮き、1人の女性の首を絞めていた。その下にバラバラになつた般若面が落ちているところを見るとおそらく、首を絞められている女性がビデオに出ていた人なのだろう。血まみれになつて床に倒れているのはおそらく魚の面をかぶつていた男だ。そして今戦闘中なのがさつき自分たちが戦つていた男。瓦礫からのダメージが大きかったのか、足がふらついていた。闇が男を包み込み、三秒後、男は意識を失つていた。

葵とレキにはわかっていた。しかし信じられない光景に思わず聞い

てしまう。

「夢人・・・なの？」

第十話 解放（後書き）

投稿が遅くなってしまうすみませんでした。

とりあえずまだ忙しいので不定期更新が続いてしまいそうです…

後、プロローグから少しずつ編集し直しました。そのうち全話修正しますのでそちらもよろしくです。

第十一話 呪われた魔法（前書き）

現時点ではまだ各話の修正が終わってませんがとりあえず執筆放棄
と思われる前に最新話を書いてみました。

もともとおかしな作品ですが少し間が空いたのでさらにおかしくな
ってるかも知れませんが多少は目を瞑ってくれたらありがたいです。

第十一話 呪われた魔法

「この魔法はな、禁呪なんだ。だが今はまだ夢人もたった三歳。制御は不可能だろう。だがな、こいつも俺の息子だ。この魔法を正確に扱える日が来るだろう。そのときは、よろしく頼むぞ『シイナ』」

「まだ十歳にもなっていない少女にそんな大変なことを任すのって普通に間違っていない？」

「あつはつはつはつは！シイナはその歳でもものすごく大人な子だからな！大丈夫大丈夫」

そう言つて男が少女の頭を撫でる。少女は頬を染めながらもまっすぐ男の目を見ていた。

頭から手を離し、男は立ち上がる。今まで少女に見せていた笑った顔とは一変し真剣な顔になる。

「シイナ・・・後は任せる」

「わかつてる。夢人は私が守る！」

「夢人・・・なの？」

葵の問いかけに対し夢人はシイナと呼ばれていた女性を手から離れた。

夢人はそのまま左手で自分の周りに纏っていた闇を操り、葵たちの周りを取り囲んだ。

「くっ！風よ！！収束せよ『フライ』」

レキの魔法で葵とレキはまだ闇に覆われていない空中へと飛び上がった。

「葵さん、とりあえず夢人さんの意識を失くしましょう。このままじゃ私たちがやられてしまいます」

「わかつてるわ！いくわよ、『水の刃』」

葵は刃を構え夢人の背後へと降り立った。

「夢人、少しの間眠っててね」

「愚かな・・・すでにおまえはとらえている」

その瞬間、葵の視界が黒に変わる。そのまま葵はその場で倒れた。

「話すことができるのですね・・・あなたは滝沢夢人ですか？」

「ああ、何を言っているんだ？おまえたちも良く知る男なのだろう？この男は」

「そうですね、ですが纏っているのはそんな禍々しい風じゃなくともっと優しい風でしたかね」

「違うなあ！これが滝沢の風、滝沢の力だあああ！！！！！！」

レキの後ろからも包み込むように闇が迫る。風を使い吹き飛ばそうとするが魔法吸い込んでしまようだ。レキは闇のない方へと走った。しかし前も後ろも右も左もとうとう頭上までもが闇に飲まれた。

「久しぶりの感覚だ。この血はやはりおもしろい」

「式神召喚。ふり被え、『黄泉送りの使者、ペルセーネス』」

狼に良く似た、しかし大きさは5メートルを超える獣が現れた。頭には角が生え、鋭い爪を地面に突き刺し、ぎらぎらとした目つきで夢人を睨みつけていた。

「なんだ？そいつは？そんなモノで俺の闇をふり被えると思ってるのか？」

「当たり前でしょ。やって、ペルセーネス」

式神をだしたのは満身創痍のシイナだった。シイナの出したペルセーネスは夢人へと走り出した。しかしペルセーネスにはレキの時と同じように全方位で闇に取り囲ませた。

「その程度だろう？」

「あなたがでしょ？」

シイナは夢人の真後ろへと回りこみ首へ剣を突きつけた。

「終わりね。さあ、はやく夢人の体からあなたのかけたその呪われた魔法を解きなさい」

「俺を終わらせられればといてやるよ」

シイナが突きつけていた剣が夢人の体から発していた闇の中に引きずり込まれた。剣はそのまま粉々になり床へと落ちる。

「じゃあな、女」

「私はね、切り札は・・・勝てる数だけ用意するのよ？」

シイナがそう言ったとき夢人にはすでに一本の角が刺さっていた。
ペルセーネスの角だ。

「この、獣は・・・さつき闇が引き込んだはずだが？」

「残念ね。この子の角はね、どんな魔法でも被う角。あなたのどの魔法もこの子には効かないわ」

「そうか・・・それは失敗だった。次に出るときはもう少し気をつけることにしよう」

余裕な表情で話す夢人はシイナに笑みを見せる。

「次はないわ。あなたはここで終わるのよ」

「滝沢優影、あいつの言ったことはこういうことか」

「！あの人が生きているの！？」

シイナは驚きながらも目線をそらさない。

「さあな・・・俺もあいつにはもう入れないからわからないな」

「なら、いい。ばいばい、次の世ではまた別の子に滅せられてちょうだい」

「そうはいかないな。まだこの世代でやることがあるんだ。ひとまずは姿を隠すかな」

「姿を隠す？また夢人のなかに入るつもり？」

「答える義理はない。ただこの場から去るだけだ」

その言葉だけ残し夢人はその場へ倒れた。夢人からは先ほどまであった膨大の魔力はまったく感じられなかった。シイナは小さく息を吐きその場にしゃがみこんだ。

終わったんだ・・・シイナにはもう魔力が残っていなかった。だから追えなかった。いや魔力が残っていたとしても追っただろうか・

・いや、そんなことを考えてはだめだ。約束のため、強くないければならない。夢人を守らなくてはいけない。シイナの決心が今回のことで揺れることはなかった。

「夢人・・・」

そう呟いたとき後ろからの僅かな殺気。シイナが振り返ろうとしたとき首にはすでに刀が突きつけられていた。

「あなたが自由に動けるようになる前に問いたいことがあります。あなたは味方ですか？それとも戦わなければならない敵ですか？」

そう言つて刀を突きつけていたのはさっきまで気を失っていたレキだった。レキからしてみればシイナは夢人をさらつた誘拐犯であり、今回夢人が変貌してしまつたのも彼女のせいだと思っているのだ。

「そうね・・・私は夢人の味方。でもさすがに今回のことに巻き込んだしまつた以上あなたたちにも事情を話す必要があるみたいね。後、本人にもそろそろ思い出してもらいましょうか」

それからどれだけの時間が経つただろうか。レキの後に葵が目を覚ましシイナの仲間たちも目を覚ました。そして・・・夢人が目を覚めます。

「夢人さん！大丈夫ですか！！」

「あつ、ああ。問題ねえよ」

「それじゃ全員目を覚ましたみたいだから話を始めさせてもらつわ。過去の話と未来の話を・・・」

『第十一話 呪われた魔法』

「優影、優影！早くしないと今日は王国軍で年に一度のすごく大事な会議があるんじゃないかなかったの？」

「ん？そうだったかな。『藍花』おまえよく知ってるな〜！」

「あなたが隊長なんだからしつかりしなさい！」

「おっ！副隊長様はきびしいね！。そう思うよな〜、夢人」

「いいから行け！！！」

なかなか行動をおこさずに自分の息子を撫でている優影の後頭部に藍花が回し蹴りを炸裂させた。その結果、優影は気絶・・・したが今度は藍花の、かかとおとしが同じく後頭部に炸裂。一周回って意識を取り戻すことに成功した優影は、「え・・・っ？そうだはやく王国軍に行かないと！」殴られた記憶だけをとばしていた。藍花は何事もなかったかのようにニコリと笑い、優影を家から送り出した。

頭にたんこぶを作りながら王国軍に向かう優影を市民が見て「今日も平和だ」とつぶやきながらニコニコ笑っていた。どうやらこの国では当たり前の日常のことなのだろう。

「おー、滝沢さま。今日はすごく良い魚が揚がったんだ。どうだい？きょうの昼飯に家に食べに来ないかい？」

「いいね〜。でも今日は王国で昼飯が出るんだ。悪いな」

「そりゃ残念です。またいつでもどうぞ！」

滝沢優影。王国軍の中でもいつも街の市民たちと楽しげに会話している。彼は王国軍のなかでも高い地位にいるが市民といつも分け隔てなく会話し、好かれている人物なのだ。そのうえ王国軍からの信頼も厚い。まさに英雄のような人物であった。さっきのように街の人達と話をしながら歩いていき、王国の城に到着した。

「王様、今日は何の御用ですか？言つときますけどギルドの救援要請はしばらく引き受ける気ありませんよ？」

「わかつている。今日はギルドからじゃない」

「ということは…あなた自身の出す？」

「うむ。滝沢優影！ここより東にある森。ヴァニティへの調査を命じる！」

「ヴァニティですか？あんな森でいったい何の調査を？」

すると王様は立ち上がり優影に背を向けた。

「最近、あの森に奇妙な噂があつてな。入った者が二度と帰って来ないらしいのだ。すでに王国軍でも調査隊を編成し何部隊も向かわせたのだが誰一人帰つてこない。街の人間がこれ以上不安にならないためにも行つてくれないか？」

「王からの直々の勅命なら誰も断れないでしょう？まあ任せてください。この任務、俺が成功させてきますよ」

「すまないな…よろしく頼むぞ」

昼食をとり、城を後にした優影はさつそく任務の準備のために家に帰った。

家では藍花が夢人を寝かしつけたところだったようだ。どうやら夢人と一緒に藍花も寝てしまっている。優影はまるで子供のように笑みを浮かべ近くの筆で藍花に落書きをした。

しかし、藍花にはまったく起きる気配はない。このまま自分が任務に出掛け、藍花が落書きに気付かずに外へ買い物に行って街の人間の笑いにされれば任務から帰ったとき自分が蹴られるところじや済まないと考え一応机に「鏡見るよ」と書いておく。

いたずらは好きだがMじゃない。それに自分の奥さんが笑いものにされるのは良い気分じゃない。

ならいたずらをやめれば良いだけなのだが、それは自分とのスキップだと思っているので辞めるつもりはまったくなかった。

最後に夢人の頭を撫でてやり、任務の準備を始めた。優影は基本的には武器を刀を好んで使っている。

刀を使わせれば王国でも敵うものはいないとされるほどの剣の使い手なのだ。多少は魔法も使える。ある程度の敵に遅れをとることはなかった。

今回、王が彼を幾度も失敗している任務に優影を任命している理由がそれだ。ここ数年で王国軍は少し弱ってきていた。弱ってきているといっても国民には気付かれない程度にだ。

しかし、こうして難しい任務がうまれてしまうと対処できる兵がほとんどいない。

そうした中、優影は王国軍の中ではかなりの任務をこなしていた。安心して任せておける人材なのだろう。

準備を終え、バイクにまたがる。大きなエンジン音を鳴らしヴァニティへと走っていった。

ヴァニティの森は森というよりは樹海だった。樹海は奥に進めば進むほど、暗がりが増し草木は長く伸びていた。ライトを当てながら優影は慎重に進んでいく。

これだけの樹海ならいつモンスターが出てもおかしくはない。戦闘準備だけはどんなときもしていた。

なぜ今までこれだけの森が放置されていたのか優影は昔聞いた話を思い出した。

たしか、この森には封じられている力がある。もしその封印が解かれれば世界が滅ぶかもしれないと。

そんな話があったから誰も近づかなくなったのだが、最近になってこの森に財宝が隠されているという噂が流れたらしい。興味をそそられたトレジャーハンターや盗賊、さらには生活が苦しくなった民もがこの森に入り込んでいるとのことだ。

魔物に遭遇することもなくさらに樹海の奥へと進んでいくとそこには今までとはまったく違う光景が飛び込んできていた。

広大な土地が広がっていた。さっきまでは狭くて木々が生い茂っていたのだが今では広大な土地の真ん中に大きな樹が一本立っているだけだった。

その木に近づくにつれて優影は驚愕していった。

「なん……だよ………これ………」

その樹に葉はついていなかった。しかし本来、葉がついているはずの枝には闇がついていた。

それはこの場所が暗いからそう見えたのではない。

違うのだ。だれがどう見てもそれは闇。どれだけ見ても吸い込まれそうな闇だった。

優影が呆気にとられ樹を見上げていると枝が揺れた。

風で揺れたわけではない。優影は確信した。

この樹は、魔法だ。昔聞いた話に登場した、おそらくこの樹があの闇を封じているのだろう。

なるほどこれだけの闇の魔力だ。もし封印が解ければ世界が崩壊してもおかしくはない。

なら今回の事件にこの樹は関係ないのか…

「また来たのか…」

声が聞こえた。

「ふっ、本当にお前たちは愚かだな」

「誰だっ？」

優影は正体のわからない者を探すため辺りを見渡していた。

「ふはははははは！！！！ようこそ身の程知らずのばかやろう！！！！」

その瞬間地面から影のようなものが伸び始めた。

優影は剣を抜き迫りくる影の手をり斬り刻んだ。

「ほう？今までの人間とは違うようだな」

「はあはあはあ、何だおまえは？」

優影は刀を構え姿なき相手に尋ねた。

「我か？我は魔法だよ。かつて人が発動させた…いや、暴走させたと云うべきかな？」

「魔法が意思を持つたと！？ありえない！」

「おまえの推測などどうでも良い、だがおまえのその器は使えそう
だ」

闇はさらに地面から影を生やした。優影はそれに応戦するが先程と
は影の数が違う。

すぐに腕を押さえつけられ、足も動けなくされた。

「これより始まるは、絶望。どうかこの空虚な世界を満たしてくれ」

第十一話 呪われた魔法（後書き）

感想等がございましたらよろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2669k/>

今夜、旗を掲げよう

2010年10月10日19時53分発行